⑨　矢倉沢往還篠窪付近

矢倉沢往還は、江戸時代初期に整備された街道で、東海道の脇街道として物資の輸送や信仰の道として発達しました。江戸城の赤坂御門を起点とし、現在の国道２４６号線はこれに沿って走っています。また、江戸時代には庶民が伊勢原の大山に登ってお参りする大山詣りが流行したり、富士講の信仰により富士山へ登る人が多くなり、庶民から富士道、大山道と呼ばれ利用されました。

『新編相模国風土記稿』によると「矢倉沢道は大住郡千村より四十八瀬水溢の時は大住郡渋沢村より本郡篠窪村に入、神山村にて本道に合す、此道を富士往来とも云」と記されています。大井町を通る矢倉沢往還は、四十八瀬川が氾濫した時の脇往還として整備され、秦野市から峠を抜けて篠窪を通り、松田町へと至りました。また、途中、富士見塚（榎堂）には分岐があり小田原方面に向かう小田原道としても利用されていました。

矢倉沢往還篠窪付近　かながわ古道５０選

三嶋社に移設された道標

この道標には漢字がなく、旅人が富士山を指し示す絵で、文字を知らない旅行者にも語りかけている。

富士見塚の碑

「冨士山大神」と表に彫られた石碑がある。明治１５年に富士講の指導者冨士玉産（ぎょくさん）の篆刻といわれている。

庚申塔の道標と后土神の道標

三嶋社の境内に道標がります。これは三嶋社の西側約１００ｍのところに富士見塚があり、この場所はかつては、北は大山道、南は小田原道、飯泉観音の道、西は富士道の分岐点でした。富士見塚の付近には、庚申塔の道標や后土神の道標や観音像の道標、出羽湯殿山信仰の寛文年間の碑や、江戸時代の名僧徳本行者の碑などがありましたが、明治の初めに三嶋社や地福寺の境内に移されました。